

月見里農業紀行

(やまなし)

月見里(やまなし)農業紀行について

山が無い里は月がよく見えることから「月見里」と書いて「やまなし」と読み、山梨という地名の由来の1つとされています。この月見里農業紀行のページでは、山梨県内の様々な農業用施設(ため池、水路、農道等)の様子を紹介しします。

楯無堰

人々に受け継がれる 楯無堰

楯無堰は、江戸時代に造られた農業用水路であり、北杜市明野町の塩川を取水地点とし、韮崎市穂坂町を通過して、甲斐市龍地まで流れていきます。この堰の工事は約30年という長期にわたり、水の取り込みが困難で農産物を作れない土地をどうにか田んぼや畑にしたいという人々の思いを受け継ぎながら完成に至りました。

今ではこの楯無堰により、この地域は県内でも有数の米の生産地になっています。

楯無堰を拓く

楯無堰は、江戸から来て宇津谷村で暮らしていた浪人(一説には江戸商人)野村宗貞によって拓かれました。宗貞はこの地で生活していく中で、常に水不足で耕作もままならない立石原(韮崎市宮久保付近)の人々の苦しい暮らしを知り、堰の開発を計画しました。宗貞は地元の人から資金を集め、1666年(寛文6年)に堰作りを始めました。

楯無堰の工事は、起伏の激しい地形(丘陵地帯)を横断させながら全長約17kmをわずかに36メートルの高低差で水路を通さなければなりませんでした。そのため、工事には高度な技術が要求されました。

工事は着工から2年半後に一旦完了を迎えました。しかし、水を流すと途中でしみこんでしまったり、上流の村で水が使われてしまったりしたため、龍地まで水が流れないことが度々ありました。そのため、前もって水を貯めておけるように、大きなため池を設けることで解決しました。

このように、問題が起きても工事は多くの人々に受け継がれていき、失敗と修理を繰り返しながら、約30年後の1694年(元禄7年)に楯無堰が完成に至りました。

(参考資料 ふるさとの水の歴史 楯無堰)

楯無堰の名前の由来は?

「立石原」という地名を「楯無原」と呼ぶようになり、堰がその地内を通過していたことから「楯無堰」と呼ぶようになったそうです。

どうして楯無原と呼ぶようになったの?

戦国武将であった武田家は、「楯無しの鎧」という楯が不要なほど丈夫と称される鎧を代々所有していました。武田信玄が立石原で戦をした際、楯無しの鎧を着ていたことから立石原を楯無原と呼ぶようになったそうです。

楯無しの鎧は国宝として甲州市の菅田天神社に保管されています。



甲斐三堰について

山梨県には農業用に作られ、地域で守られてきた数多くの堰(水路)があります。その中でも規模が大きく、代表的な堰は「甲斐三堰」と呼ばれています。

今回紹介する楯無堰の他に、徳島堰(韮崎市~南アルプス市)と朝穂堰(北杜市~韮崎市)があります。

